

ある“化石”の感想

NAIG 飯島俊吾

シグマ委員会も丸25年になるとのこと、思い出せば発足は1963年であり、メンバーは殆んど20～30才代の若手であった。当時は原子力関係では40才以上の研究者は極く少なかった故であるが、今から思えば羨ましいような時代である。

私は熱中性子散乱のグループでコード開発や理論の勉強をしていたが、御存知の通り熱中性子散乱は化学形態や温度に依存する。そういうものを核データと云えるのかと、当時の主査の百田先生や、真正核データを目指す人達からはいつもうさん臭い眼で見られていたような気がする。理論の勉強もどンドン分子、結晶、液体等の物性物理に深入りし、会合議事録にも「勉強」等と書くのでサロンのあるときつくお叱りを受けたおぼえがある。和気愛々とやっているのにと何で怒るのだろう、サロン 大いに結構ではないかと憤慨したものである。

—昨年であったか、チェロ奏者モーリス・ジャンドロが来日した折に、戦前のことであるが、或る夫人が主催していたサロンのことを話していた。ヴェルレーヌを主客とし、ジャン・コクトー、ピカソ、コルトー・カザルス等が居り、特にヴェルレーヌの話はいつも大変啓発的であり、そこでの論談は世界観形成への大きな糧となったと活き活きと語っていた。核は異なるにしても、シグマ委員会のサロン性は現代の世の中では貴重なものであり、私はそれを大切にしたいと思っている。

核データについて未だやる事があるのかと云われて久しい。IAEAの岡本さんによると核データは所謂「死に体」であるというのである。炉物理の世界ではもっと早くからそう云われて居り、学会のパネル討論のテーマになったこともある。しかし、その後も炉物理が絶えていないことは、この10年間の世界の研究の発展を見れば明らかであろう。核データも同じと私は楽天的である。少なくとも日本では、基礎面でも応用面でもやらなければならない事が沢山ある。欧、米、ソ連、中国等からも今後少なくとも10年以上にわたって多大の寄与があるに違いない。

そういう訳で、核データ分野自体の特束については私は楽天的である。楽天的でないのは、この所とみに科学者、技術者の老いも若きも、管理やコスト意識に煩らわされ過ぎていることである。何年前か、GGAのノルドハイムや、イスラエルのアミエルに会う機会があった。ノルドハイムは当時70才を起えていたが、炉内での炉計算の討論に熱心に加わっていたし、アミエルは脳手術後間もなくであったがF P国際会議で蒼白な顔をし乍らも、ユル・プリンナーそこのけの迫力で議長を務めていた。若い人達が「his devotion to science」がその気力を出させているのだと語っていたことが非常に印象的であった。こういう言葉が自然に出て来ることが欧米の科学の基盤となる精神的バックボーンであり、それが現在でも存続していることを、今更恥づかし乍ら認識し、感銘した次第であった。日本の科学もかくありたい。